

批評の甚しき
し第三者の中
中村夫

大西匠人氏の「字定と創作」

— 再中村夫氏へ (四月二十一日)

紙— さまよい。 疎少しかかりしをい

氏の前の「^{論文}」は、全箱の隅を

と二三かゝり始め、おもしろか

文筆の問題 ^{提起し} 得る要素を

。 三十一 借ひ、字重と創

いよ六向の活を 覚長とせしこ

ところが氏は、^力の

自己辨及と 漢字の如く

亦ハ眼といる。 かりか

これわがは、一般の活者

せう。 微少 ^{キコ} 味

とどろか、おけい馬鹿

どい程とされ、 ^自 介

氏いふ、おのの精見

ととととととととととと

ととととととととととと

白木の板... 世に...